

## 無垢の喪失

——デイラン・トマスの詩集「死と入口」——

久納泰之

苦患のなかの視点——トマスのエネルギー——性・生と死——エデンの園——情感のひろがりとその限界——詩集  
「死と入口」——「羊歯の丘」——畏に落ちた動物の悲哀。

初期のシムボル群はトマスの暗黒の世界を示唆する。だが、暗黒から光明を目指す個人的闘争のなかで、彼は次第にその定点を移動し、いくつかの新しい世界を発見していった。

ソネット *Altarwise by owl-light* 以後、トマスはその特殊なシムボル群の大半と袂別し、彼の人生観の変容にとともに新しいシムボルと新しい用語の創出を図った。

トマスは薄明のなかで自己をある地点に定着させようと努めた。「死と入口」が出版された当時、Henry Treece は、作家のなかには情動は晦渋性を通して高められる、と信じている者がいるが、そのような情動は白昼の太陽に照らされれば、たちまち姿を消してしまうものだ、という T.S. Eliot の言葉を引いてかなり批判的な説明を試みた。だが、トマスは自己の荒野に住む異形の影と苦闘していたのだ。

*In the name of the wanton*

*Lost on the unchristened mountain*

*In the centre of dark I pray him*

(Vision and Prayer)

だが、彼は祈りながらも確信を抱くことができない。トマスは苦悶する。この苦悶を越えて新生の芽吹きがある筈なのだが。「死と入口」には詩人の受難の姿が見られる。と同時に、そこでは彼の情調も表現も前向きである。

*I turn the corner of prayer and burn*

*In a blessing of the sudden*

*Sun. In the name of the damned*

*I would turn back and run*

*To the hidden land*

*But the loud sun*

*Christened down*

*The sky.*

*I*

*Am found.*

(Vision and Prayer)

死の数年前、トマスは聴衆を見出した。彼の聴衆は手のつけられぬ聴衆である。ひどく難解な詩人に対する聴衆である。そして、この聴衆との出会いもついに詩人としてのトマスには解決を与えなかった。彼は劇作、演出などへ手

を伸ばした。だが、トマスの望んでいた、そして、聴衆の求めていたのは、詩であった。詩の創作過程にある詩人の苦患を希求していたのである。

後期のトマスが愛から信仰への過程を辿ったとしても、僕たちは、彼の詩のなかに、トマスが他者の思念や感情を他者の視点に立って感得した跡を見ることは結局不可能であった。他者の置かれた状況を見ると、トマスは常に彼自身の情感の対象物としてのみそれらを捉えているのである。その詩のなかへ、トマスは他者への無限の感動を投入することができる。だが、その感動は他者と同一体になって体験されたものではない。トマスの詩が僕たちをゆすぶるのは、そのなかに彼の特殊な主体的情感が他者に向けられている、という点においてであり、他者の苦悩や感動へ自己を投入して表現しようとしているためではない。「空襲で焼死した子供」に対して、崇高な深い悲哀に打たれる彼は、その子供の体験を想像して共感的に苦しむのではない。他者に対して共感的感動を覚えることは決してない。他者の恐怖や苦痛を外から考察するトマスの決意は彼個人のための決意であって、その子供のためになされるわけではない。

*Never until...*

*...the still hour*

*Is come of the sea tumbling in harness*

*Shall I let pray the shadow of a sound*

*Or saw my salt seed*

*In the least valley of sackcloth to mourn*

*The majesty and burning of the child's death.*

(A Refusal to Mourn the Death, by Fire, of a Child in London)

また、塔のなかから外界を観察するトマスの姿は、彼に一連の奇想 (conceits) を提供した百歳の老人の爆死をうたった作品にもよく表れている。この詩はまことに解りにくい。だが、その理由は、それが曖昧であるからではなく、そこに見られるトマスの情感が、他のどのような情感にもその類型を見せないものであるためなのだ。塔中の詩人の想像力はすべての空間と時間を超越して、トマスを潤達に動かすが、どんな情況に置かれても彼の目に映るのはトマス自身なのである。虫や動植物の世界へ自由に入りこんでいくトマス自身の両眼は常に異様な光茫を見せている。ひとつの世界を発見し、創造する場合に、彼は自己の思念や感情の中心部に立って、自らのイミジに合わせて仕事をつづける。Olson 教授によれば、トマスは、創造した人物の内部に身を置いた、Dante や Chaucer, Shakespeare あるいは Browning でなく、トマスは Keats であり、Byron であり、Eliot だ、ということになる。

トマスは自己自身の想像力以外のなものにも屈従しなかった。彼自身の想像力とは、トマスの唯一正真の知識の源泉、換言すれば、彼自身ということである。これは詩人としてのトマスの面目である。反面、彼の弱点は、周囲で騒然と行動する、種々の文学上の先覚たちから自己を完全に守護し得なかったことである。彼は純然たる恐怖の結果身動きできなくなったのだ。

たしかに「一八篇の詩」や「二五篇の詩」に見られた受動性は消滅し、動きのなかでひとつの定点を獲得しようとする前向きの姿がある——定点を追う彼の姿は時折波濤の谷に隠れてしまうことがあったにしても。だが、その前向

きの姿勢にはいくつかの制約があった。そのなかでトマスは神の慈悲と寛仁を求めている。

*O may my heart's truth*

*Still be sung*

*On this high hill in a year's turning.*

(Poem in October)

ここには限界を知らぬエネルギーの発散ではなく、孤独と恐怖の調べがある。これはトマスの弱点だ。

トマスにはひとつの過程 (process) 意識がある。この言葉は、トマス自身も言っているように、ひとつの機構を示唆している。彼は精神とか精髓といった抽象的な観念のかわりに、エネルギーをもつ組織体を探る。ここからトマスの言語やイメージに具体性が生れる。と同時に、難解さ、曖昧さが生じるのは、潜在意識的映像と生物学的な映像を、Hopkins の場合のように、混交してしまうという過程のためである。

また初期の詩に例をとれば、その言葉はひどく制約されたものであり、語彙は極めて少ない。いくつかの語の反復が回を重ねて見られ、それらの語に詩人の妄執がまといっているのではないかと感じられるほどである。

それは強制的に徴用された言葉である。“fork”, “fellow”, “half”, “vein”, “worm” などの言葉は至るところに散らばっているし、“death's feather” という句は幾度も繰り返されて出てくる。制約された語彙が多く、事物の表現に用いられると、そこに曖昧さが生じるのは当然である。しかも、トマスはこれらのお家芸の語句にあらゆる可能な意味を含ませて振りまわすのである。この頃の文は総体的に短かく、たとえ、長文の場合でも、その個々の構成要素は小さ

く短かいものである。詩自体の息が短かい。ほとんどが一行をひとつの単位とし、その鼓動は不規則で、力は安定を欠いている。烈しく動悸を打ったと思うと、次の瞬間、衰えを見せて、ぱたっと動きが止まり、突然、ふたたび鼓動をはじめたような詩が多い。

さらにトマスの想像力は、ときにむら気を起して、幻想と夢のイミジとを徹底的に浚いあげようとする。これは往々にして失敗し、あとに残される無意味な怪奇極まるイミジの巨大な集積に僕たちは直面する。

トマスの詩の多くは激情の詩でもある。だがそれは社会組織、政治、そして芸術などへの怒りではなく、彼自身への激情である。ひとつの過程のなかで、暗黒の手法を摸索する彼は苛立つ。その苛立ちは絶望と変り、その絶望は道化へと三変する。彼は Rimbaud の如く、国を離れて幻想の摸索に世界を流れる、赤裸の原初性をそなえた詩人である。彼は名声から逃れ、自己の幻想から逃れる即ち伝統の焦点から逃れることによって自己の安泰につとめた。文学的伝統の枠から後退しながらも、同時に、不正の洞窟へと引きずりこまれるように、その枠のなかへ吸いこまれていく自分を感じているのである。これはトマスのピューリタニズムであり、知恵である。

トマスの散文には多様性がある。厳粛から滑稽に至る多くの感情が交錯する。そしてそのなかの性格や情況の描写は変化に富んでいる。だが、詩人としての彼は偉大であると同時に、唯ひとつの性格しか見せないという反面を持っている。極度に結晶化された感情の——極度に濃縮された哀情と歓楽の——詩人である。そこには機智や上品さ、優雅や洗練はない。あるのは怒りである。しかも Achilles の怒りである。あるのは絶望である。しかも Philoctetes の絶望である。すべての激情が煮沸する大釜のなかで、すさまじい熱気を噴きあげているのである。

☆

セックスを中心テーマにした詩を除いて考えると、セックスが信仰と知識の手段として用いられている詩がいくつも見出される。人間はすべて病氣であり、この世界はひとつの病院なのだ、という現代文学の常套句をかざしながらトマスはセックスこそ人間を（彼自身を）五体健全に回復させてくれるものだと言いたいのであろうか。Karl Shapiro氏は、そこにトマスは、おそらく、Druidismそして原始社会の fertility rites（ウェールズでは現存しているという）を示唆しているのであるとし、すべてが Henry Miller や Freud などとの混交のなかへ押しこまれることになる、と言っている。そして反面、セックスとは、トマスが幾度も言っているように、生殺与奪の権を所有しているのである。そこからトマスは現代病の患者の回復に対する確信を失いはじめた。

トマスがたいていの場合、苦渋の表情を見せる情愛（love）のかわりに、セックス（情愛の手段であり、肉体的プロセスである性）がある。このセックスの活動が、人生と宇宙における情愛へと通じていくことを、トマスは詩のなかで希求する。だが、情愛はますます遠くへ去り、セックスは恐怖となり死のミサとなり変ってしまう。

生誕は死のはじまりだ、という命題にとりつかれた詩人は袋小路を歩き出した。この命題はトマスの詩の基底となるものであるが、この両者を繋ぐひとつの世界が創出されなければ、まったく無意味なものとなる。トマスはこの命題から離れることができず、セックスに対する彼の固執も、この生と死の連がりに向けられたメスにはかならないのだ。情愛の理想化、よかれあしかれ、たいていの詩人たちの試みた伝統的な解決方法は、トマスの場合、ついに見られなかった。情愛という肌色の違う土地へ飛びこんでは、また飛び出していくトマスである。情愛をでっちあげるにはあまりにも純粋な詩人であった。彼は情愛を感得することができないのだ。疑念がつきまとう。信じられない。そしてトマスは情愛の過程、攻撃、敗北、恥辱、絶望の上に自分をもたれかけさせようとする。その成功を疑いながらトマスは、幾度も繰り返して、情愛のために、儀式的な法式をもちだしてみる。だが、現実性がないために、その過

程を詩人は自ら軽侮しなければならぬ。「トマス詩集」(Collected Poems)の序文のなかの「人間への愛と神への讃美のために」という言葉には虚勢のひびきを感じられはしないか。この言葉どおりであるとすれば、願ってもないことなのだが。神と人間への頌に、人は感謝し、かすかに驚きの念を抱く。彼の詩の底流にはどこにもヒューマニズムや信仰は見あたらぬのだから。あるのは、悪魔への指向と嘔吐を催すような恐怖と、自ら求めた芸術家の磔刑なのである。

「死と入口」のあとで発表された幾篇かの詩のなかで、トマスはふたたび死のテーマへ帰っている。そして、中期の簡潔さにかわって、語句の過剰が目立ってくる。文や節は異常に長くなり、形容句が次々と積み重ねられて、いつもの語群がひとつの合成句を作るために凝集され、ついにはそのあまりにも長い言葉のひろがりによって僕たちは息を切らすほかはなくなる。イミジャリーは魅惑に富んでいても、そのなかに僕たちはあるこじつけを感じるのである。そして、ここで扱われている死は、初期の作品に見られた暗黒の死ではなく、自然界における生と死の至近性と僕たちの周囲で生が生を蝕んでいくという苛酷な現実のなかで、突如として近づき、未知の死の瞬間である。

初期の詩ではアダムは罪のシムボルであり、消滅する肉体の象徴であったが、その後、アダムは、次の詩行にも見られるように、起源の上で祈りを唱える高潔なアダムとなる。

The

Born sea

*Praised the sun*

*The finding one*

*And upright Adam*

*Sang upon origin!*

(*Vision and Prayer*)

また、エデンの園は「リンゴ」のために原罪の生れた園として出発するが、後に、エデンは人間の原初的清浄の象徴となり、人間はキリストの救いの表われとして、この清浄をふたたび与えられる。洪水はひとつの恐怖であったが、やがてノアの箱舟によって守護されることになった。

Fern Hill の第四連は、

*And then to awake, and the farm, like a wanderer white*

*With the dew, come back, the cock on his shoulder: it was all*

*Shining, it was Adam and maiden,*

無垢の喪失

という詩行ではじまっている。飛翔した夢の世界から懐しい田園へと帰ってくる幼児の無垢の目には、太陽がふたたび大きくまろくなつて輝くことが、奇跡のように思われる。創造の奇跡の復元である。すべてがもとどおりに安定を見せ、信頼を寄せることのできる存在となる。雲は空に浮んで好意を示し、幼児が眠りに就いたとき、暗闇のなかへ閃光のように消えていった、無頼の馬の群れも、いつもの馬小屋から、ふたたび姿を現わす。そして「讚美の野原」(the fields of praise)へと歩きはじめなのだ。これは神の寛仁と神への感謝を示す草原なのである。

自然を讚美するトマスは、人間が追放されたエデンの園へ思念を遡らせ、その幼年時代を歎びの言葉で語る。「すべてが輝き、アダムと処女」の姿があった至福のなかでトマスが追っていたのは何であったのか。

*Now as I was young and easy under the apple boughs*

*About the lifting house and happy as the grass was green,*

(Fern Hill)

トマスの宗教的イミジャリーは過敏と思われるほど頻繁に使われている。ウェールズの非国教徒 (Nonconformist) の厳格さにまったく無関心ではなかったトマスは、罪の意識と瀆罪の希求から生れた、さらに厳密な意味での帰依と裁きの必要を感じ、そこに新しい人間への神に対する責任と従順とを求めていたのかも知れない。これはある意味での精神的成熟を示しているのだが、それはまた同時に、植物界の現象にひとつの衝動をもって詩的感応を試み、人間世界の動的な変容性と植物界の静と安定との対比を押し出している点にも示される。

キリストの死をまことなる生命の復活に対する象徴と信ずる点において、トマスはある意味でのキリスト者であるが、彼の正統派的な歩みは、その地点から先へは進まなかった。

トマスの汎神論は父なる神を全自然のなかへ吸収し、現世の試練は永遠の至福への過程であるとする観照とはおよそ対極に立っている。彼の復活観は、神秘的な様相を呈するが、その実体は詩人自身によっても明白にされないのだが、トマスの詩を縫って現れる多くの隠喩的言及が、詩人の思念におけるキリストの立場を表明している。W.R. McAlpine 氏によれば、トマスのキリストは、“time's nerve”であり、“the dazzler of heaven”であり、“the gentleman of wounds”であり、そしてひとつの光り、光りのみどり児である。また、荒れ狂うみどり児でもある。

僕

は佇む

沈黙した石のように

ミソサザイの骨のように

壁のそばで　そして　薄明のなかの

母親の　苦悶の　声　と

礫形の影を宿す冠をつけて　いばらのように

明日の運命を　振りあてる　幼児の言葉を聞く

奇跡の　助産婦たちの　歌声は　つづく

荒れ狂う　みどり児が

僕をその名とそのほのほで焼きつくすまで

そして　突き抜かれた　壁は

灼熱の冠で　引き裂かれ

明るい　光に　むかって

みどり児の　腰から

ひろがっていく

暗黒

〔幻影と祈り〕<sup>(1)</sup>

トマスはキリストの実体の二重性を、その詩のなかではっきりと描き出す。謙譲と純朴、貧しさと愛とを伝える「無垢の光」は、謙虚な声で、高ぶる者、権力と富と傲岸とにふくれあがった者へ呼びかける。と同時に、「口にかがり火」を持って生れた子は、その呼びかけが、恐怖と無気力と烈しい敵意に迎えられることを知って、警告を発するのである。「われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらず、反って剣を投ぜんために来れり」(マタイ伝、一〇章三四節)。

☆

トマスの性(生と死)への妄執からの移行と、受動性と熱烈な歓喜の置換にともなって、ロマンティズムの様相がいくつか現れてくることをW.R. McAlpine氏は指摘する。それは自然の讚美と「幼少期への復帰」といいかえてもよい。孤独な本能が現代社会の呪縛から逃れようとして選ぶ道である。死によるまことの生命の復活をうたうと同時に詩人は生の圧制と崩壊、生の機械化と人間疎外という現実を直視しなければならぬ。これらの様相を如実に映し出している現代文明はひとつの荒地なのであるが、それはまた、ロマン派の詩人の目には、傀儡のように、規制の糸にあやつられる嫌悪すべき存在でもある。孤立した魂は「崇高なる原始」へ、原初的存在へ、自然と純朴と無垢の世界へ回帰する。

こう考えればトマスの情感のひろがりの限界性とひとつの性格への制約とは、ある意味では、彼が高潔な叙情詩人であったことを示すわけだが、これを過大評価するのは危険である。

このように極めて限定された傾向をもつ詩人は、至高のものを目指し、それを完成するか、さもなければ、蹉跎す

るかの宿命にあるという事実を看過してはなるまい。その詩の基底にある意想 (conception) が強力で高雅なものであり、それが詩人の作品のいろいろな技巧を制御している場合には、トマスの価値は卓抜なものとなる。一方、その意想が浅薄なものであるが、その処理法が未熟で十分に意想の姿を表現していないときには、僕たちはトマスに失望せざるを得ない。換言すれば、彼の詩は思考と情動の強大なエネルギーと、豪華なスタイルの外衣を必要とするのである。そしてその高遠な意想が欠けているときには、エネルギーは暴虐な騒音と化し、その悲劇的な情動はメロドラマ的になるか、病的なものとなってしまふ。愉悦はヒステリアと化し、豪華なスタイルは難解な誇大語句となるのだ。しかも、トマスが自ら創出した技巧を制御しえなくなった瞬間、その技巧が逆に彼を支配しはじめるのである。

ロマンティズムの伝統的なテーマに復帰したトマスではあったが、彼がそれらのテーマを詩のなかへ採り入れるとき、そこにはロマン主義に附随した哲理の様相は見られないことに留意しなければならない。その復帰は、ある指標をもった社会的運動に連なるものではなく、また、功利主義に通ずるものでもなかった。自然と幼年時代というロマン派のテーマのなかに、トマスの見出したものは何であったか。それは社会の束縛に対する個人的反撥の吐け口と詩人の社会への闘争の部分的な解決の二つであった。この地点で彼のロマンティズムは終ってしまう。だが、そこで彼が詩の真実を解明し、すべてを純朴さの極限で受けとめるのだ、という信条に立ったことを考え合わせてみると、それはまことに見事な終末であった。

トマスは、自分が生と死の懸け橋、自己と世界との懸け橋をもたないことをはっきりと認識した。彼の詩は、彼自身言うごとく、極めて直写的 (literal) なものである。だが、その直写性は、終始、意味ありげに見せる文学への挑戦なのだ。偉大なシムボルの上で狂騒詩をつくり、詠唱するには、トマスはあまりにも実直であった。彼は、小さな

対象物に自己の映像を投射し、ときに咆哮し、ときに激昂し、ついには、その対象物を怒りのなかで押し潰すのである。

☆

ソネット *Alarwise by owl-light* につづく詩においては、一般的に見て、語彙が著しく増加し、初期の妄執的な用語が少なくなり、息の長さと同時に文の構成要素も大きくなる。ソネットでは、弱強格五歩格 (iambic pentameter) がなお目立っているが、それはもはや制約的な意味は持っていない。“A Refusal to Mourn the Death, by Fire, of a Child in London” では第三連の第一行に至ってはじめて句読点が現れるし、また、“Poem in October” では長く複雑な各連はたいていひとつの文から成っている。初期のシムボル群は拒絶されるか、変貌を見せているが、シムボル自体の数も頻度数も減少し、そのかわりに隠喩とイミジの使用が増加している。

詩集「死と入口」(*Deaths and Entrances*) (Dent) は一九四六年に出版された、まことに小さくうすっぺらな詩集であるが、トマスの詩的業績のなかでひとつの到達点となっている重要なものである。詩人 Henry Treece は、形こそ小さいが、逆説的に言えば、二十世紀の「最大の」詩集のひとつである、とし、Eliot の「四つの四重奏」(1943) と比較している。詩集「死と入口」が出版される前の数年間に、一四篇の詩が発表されていた時間的推移を、Henry Treece の *Dylan Thomas* (p. 92) から拝借すると、次のようになる。

1940 “Into her Lying Down Head”

(*Life and Letters To-day*)

1940 “Once below a time”

(*Life and Letters To-day*)

- 1940 "There was a Saviour" (Horizon)
- 1941 "Deaths and Entrances" (Horizon)
- 1941 "Ballad of the Long-legged Bait" (Horizon)
- 1941 "Among Those Killed in the Dawn Raid Was a Man Aged One Hundred" (Life and Letters To-day)
- 1941 "The Hunchback in the Park" (Life and Letters To-day)
- 1942 "Request to Leda" (Horizon)
- 1945 "Vision and Prayer" (Horizon)
- 1945 "Poem in October" (Horizon)
- 1945 "Lie Still, Sleep Becalmed" (Life and Letters To-day)
- 1945 "This Side of the Truth" (Life and Letters To-day)
- 1945 "The Conversation of Prayer" (Life and Letters To-day)
- 1945 "In my Craft or Sullen Art" (Life and Letters To-day)

無垢の喪失

これで見ると、一九四三、一九四四兩年の二年間の空白があったのち、一九四五年になって、一月、二月、六月、七月(二篇)、十月とつづけて六篇の作品が発表されている。この二年の空白をひとつの観点から意味づけてみるのも無益ではない。一九四二年に至る過程で、「二五篇の詩」や「愛の地図」で見られた、トマスの狂熱的な用語過多の発作が次第に衰え、言葉の過剰という枠からの脱出という転機が見られる。そして一九四五年を起点として、トマスは技法の展開の必要性を感じ、宗教や人間観照への指向の意味を認識するようになり、対象に向う詩的感応に明確な

表現を与えようと意識しはじめた、と考えられる。とくに、詩集「死と入口」の題名は John Donne から採られたという事実が示すように、トマスが人間の死と崩壊の不可避性を悟り、初期の詩における狂人めいた情動と大仰とがかなり緩和されて、一段と透徹した安定性を見せはじめたことは注目に値する。「二五篇の詩」のち、トマスは塔のなかから外界へ脱け出ようと決意したのか。その行動半径は大きくなくとも、ひとつの長い探索の旅へ発つ予備的な試練を経験していたのだ。そしてこの詩集「死と入口」で彼のテーマはひろがりを増し、その詩ははじめて題名をつけて現れ、以前の特異な無意識の世界から、より描写的な世界への動きを示す。暗黒の内部世界で苦闘する詩人には見られなかった叙情詩体が前面に大きく登場してくるのである。

この期のトマスには二つの心が相互作用を営んでひとつの分裂を起している。歓喜にあふれた、宗教的指向性と、文化社会の逃避者ないしは道化役者のもつ攪乱された病的に近い情況とがある。詩人は俗悪な社会的彫琢を自己の全存在に受けることに耐えきれなかったのか。トマスは社会と自己の両方に許容される唯一の文学的行動形態を採ることを自ら強いたのか。その形態とは道化 (buffoonery) であった。かくして、すべてのレヴェルのトマス詩のなかに、特殊な純粹さと気質の分裂が生じた。これは彼の弱点であると同時に強さでもある。だが、この弱点は、詩人を無防備の状態にし、彼自身と世界とのあいだの懸け橋の可能性を破壊してしまった点に、重大な意味を持っている。

また、この詩集「死と入口」においては、全体の構成に照らしてみるとき、イミジャリーの適合性が部分的に欠けているという弱点を持つ。この詩集のなかのいくつかの詩には、たしかにテーマの広大さと壮大なスケールの上に立った全体の構成という点で、偉大な詩のもつ感動を伝えるものがある。だが、詳細に検討してみれば、どのテーマも叙述の明確さが、トマスの意図はどうであったにせよ、充分でなく、テーマの推移の状況が論理の糸から離れているものである。闘いと転進の反復展開が互いに想起的ではあるが、発展的解決を示していないのだ、といおうか。

形容語句の荒けずりなこととトマスの個人的な盲目さ——無限にほとばしり出る語句の原野で裸馬にまたがって、対象を正確に鮮明に捉えようと暗闘する盲目さか。この荒さと盲目のため、詩行を埋めるリズムカルな言葉は、相互の吸引力を失い、映像の喚起を妨げられ、「ばかでかい大鼓の上で跳びはねるエンドウ豆」のように、それらの言葉は壮大な舞台のなかで貧弱な踊りを見せているにすぎないことがある。僅か五九ページの詩のなかに：“O”や“OH”という「非喚起的な呼格語」が一八回も使われている。

☆

詩集「死と入口」には哀情と苦悩に満ちた詩行が多く見られる。

そして邪悪な願望は、植物と動物と鳥たちの

水と光、地と天の始源のかなたへ

おまえが動きだすまえに 投げすてられるのだ

そしておまえの行為や言葉はひとつ残らず

すべての真実も、すべての偽りも

裁くことのない愛のなかで消滅する

「真実のこちらを」<sup>(2)</sup>

僕は起きあがって

いっさいの人間性が息絶え、僕の光の源泉である

暗黒のひろがる闘いを迎える

懺悔の聴聞僧と賢明な鏡とを呼んでみても

神のまえに盲いた夜のあとに輝くものはなにもなく

聖なる創造主のように僕は太陽に打たれて孤独となる

「聖なる春」<sup>(3)</sup>

これらのほか、*さらば The Conversation of Prayer; Poem in October; A Refusal to Mourn the Death, by Fire, of a Child in London; Into her Lying Down Head; A Winter's Tale; On the Marriage of a Virgin* などの詩行と、次のような苦悩と受難の裏に栄光の輝きを感じた作品と比較してみるのは興味深い。

白髪 of 男の心臓の冥福を祈って

墓穴を掘らないことだ

天界の病院車がひとつの傷にひかれて立ちならび

鳥籠の上に鋤の音が鳴りわたるを待っている

おお 男の骨を俗界の荷馬車から引き離せ

朝が男の老年の翼にのって飛翔する

と、むらがるコウノトリが太陽の右手にとまるのだ

「暁の空襲で焼かれた人たちのなかに百歳の男がまじっていた」<sup>(4)</sup>

詩集「死と入口」に見られたトマスの詩的展開をしめくくる作品、それはこのような苦患と歓喜の起伏のあとで登場する *Fern Hill* である。この詩を唯ひとつの相から観察するとすれば、「失われた青春を讃える悲歌」といえるかも知れない。悲嘆と讚美の調べがこの詩の全体に流れている。讚美のひびきではじまるこの作品は情景の推移にもなって悲哀を漂わしはじめ。幼年時代の田園の理想郷を跳躍台として、トマスは回想の烈しい息づかいのなかで、田園が原罪以前のエデンとなり、「時」がきらめく剣をたずさえた天使の姿となるのを見ている。そして農園は無垢の楽園のように金色の光に満ち、純朴と永遠の流れが楽園に歓びの音を伝える。が、やがて、その歓びは崩壊と移りゆく時に支配され、悲哀の彩りをとめないはじめる。

トマスは幼年時代に自己の安息所を見出した。そしてこの桃源郷のなかに詩人の「無垢の眼」(the Innocent Eye)がある。この眼は詩人の心に幼児の小宇宙を的確に焼きつけた。*Fern Hill* に流れるひとつの調べは幼年期を遠く回想する詩人の叙情味にあふれた歓喜を浮べてさらさらと音たてる。田園風景のなかで、知的な抽象、内部世界の摸索、人間の生誕以前の次元への探究などを乗りこえた情況で、追想の波間に浮びあがるのは無垢の世界である。荒れ狂う青春や爛熟した潮流で人生が汚濁してしまふまえの、清澄な幼年時代の楽園である。

塔の外界の現実から後退するトマスは、幼年時代を回顧的に眺める過程で、現世の至福と理想という頂点に近づいていく。彼が「十月の詩」のなかで、

農園や白馬たちの上空を

僕の名前を翼にのせて飛んでいく  
水鳥や樹間にたわむれる鳥たち<sup>(5)</sup>

といっしょに歩み、また、

春の歓びにあふれたヒバリが、流れる

雲のあいだに飛び、路傍の茂みのあちこちで

ツグミがさえずり、そして、十月の太陽が真夏のように<sup>(6)</sup>

照っている丘を逍遙し、

陽の光の

寓話と

緑の教会堂の伝説のなかを

また、僕の心に焼きついている、あの幼年時代の草原のなかを<sup>(7)</sup>

進んでいくとき、天国と天上の愛は間近かに迫ってくる。そして *Fern Hill* の第一連で、トマスは金色の太陽に照らされた幼児が、歌声に満ちた田園で、自然に対して驚異と歓喜の胸をふくらませる姿を描く。時は彼にとって親切であった。トマスは幼児の小宇宙の主人公であり、荷馬車に囲まれて讃えられ、リンゴの木によじ登って、王子への憧憬を幸福に洩らす生活である。それは

*once below a time*

といふころの幸福である。この句は *once upon a time* をすぐ連想させるが、そういっただとおとぎ話の想起と同時に、僕たちは Henry Treece の “he is telling us that all this happened when he was very young, not once upon a time, but below a time, below the measuring mark, as it were” という説明にも注目すべきであろう。さらば「草が青々と生い茂っていたように幸福な」(*happy as the grass was green*) という句は草が終日青々と輝いていることから来たもので *happy as the day was long* と同じメトロ的表現を避けたもので、類似の句は第二連の

*singing as the farm was home*

第五連の、

*happy as the heart was long*

などにも見られる。農園は幼児にとってどんな場合にも自分を暖かく迎えてくれる故郷であり、幸福の象徴である歌声と結びつけられて、尽きることのない幸福を表わしたものである。また、幸福は幼児にとっては、生命のつづく限り、心臓が鼓動を打ちつづける限り、消滅する筈のないものなのだ。

衝動的な自発性と規制されない情感の動きを見せる幼年時代は、統制や社会の慣習とは無縁の素朴と清浄の時代であり、変転の烈しい世界のなかで、永遠に原初的なものを残している。この安息所へ復帰したトマスは現実社会の組織化と機械化、合理主義の流れ、に反発するロマンティストであった。Derek Stanford 氏はこの詩に三つのモチーフ

を与えている。幼年時代の意識を欠く状況、その状況での歎び、そしてそれにひとつの宿命の衣をまとわせる「時」の作用——この三つのモチーフが底流に漂い、これらが反復される過程に叙情のひびきが聞かれるのである。

第二連は、トマスが僕たちに無垢の状況をふたたび認識させようとしているかのごとく、第一連のリフレインである。 *famous among the barns* は第一連の *honoured among wagons* と相応している。緑と金色が反復して使われているが、緑は田園の形容句であり、この詩は田園の歌である。そして「時」が幼児に慈悲深いことはこの連にも見られるが、ここではさらにひとつの新しい調べが流れはじめる。

*In the sun that is young once only*

この金色に輝く恵まれた日々はふたたび訪れてくることのない、限りあるもの。そして幼児の世界においては、異様などと思われる、宗教的感応のひびきが伝えられる。安息 (*sabbath*) が聖なる流れの小石のなかで静かな音を陽炎のように響かせていたのである。きらきらと陽光をはね返す水流は神の業と、幼児の目に映る。河には緑色の鐘が明るく鳴っていた。それは理想の楽園を流れる河の音であるかも知れない。

トマスはほとんど言葉がついていけないほどの溢れる至福の世界へ飛翔する。

*All the sun long it was running, it was lovely, the hay*

*Fields high as the house, the tunes from the chimneys, it  
was air*

*And playing, lovely and watery*

*And fire green as grass.*

天に輝く太陽や月 (cf. *All the moon long*) は昼や夜よりも幼児にとっては自然に密着したものだ。同様に、「草が青と萌えるような火」とは幼児の目に「草が緑色に燃える火」のように映ったのである。「家と同じ高さの乾草畑」のなかで彼はひとつの楽園を創り、その小宇宙に無限のひろがりを見出す。このようなおとぎの国の世界で「馬の群が暗黒のなかへ閃光のように走り去っていった」(*the horses/Flashing into the dark*)のは何故であろう。

トマスは「讚美の野原」へ歩きはじめ、かつて荷馬車のあいだで讚えられ、納屋のあいだを走り回り、馬小屋のなかで祝福を受けたように、キツネやキジに囲まれて讚えられる (*honoured among foxes and pheasants*)。田園のおおらかな自由を存分に味わうのである。だが、この幼年期の朝の歓びは限りあるものだ、と告げる声が聞えてくる。彼はその無垢を喪失し、成長しなければならぬ。無垢から経験へ、恩寵から崩壊へ、統合から分解への経緯を知らされるのである。イミジャリーは次第に冷却していく。陽光の降り注いでいた田園にも、いつか夜のフロウヤや「太陰が天に輝いているあいだ」「農場を運び去っていった」などという冷たい不気味な空気が漂いはじめる。そして無垢の喪失は、

第六連で繰り返してうたわれ、「小羊のように純白な日々」(*The lamb white days*)には考えてもみななかった厳しい世界が迫っている。かつては親切だった「時」が少年の影の手を掴み、彼をツバメの群住する馬小屋の二階まで、夜気のなかを連れていくのだ。少年は、変化の波をくぐりぬけたのちの、かつての幼児の影として登場してくる。彼は楽園に残した半身から離脱した、影の存在だ。この連にはいって、イミジャリーの冷却度は大きくなり、

...that time would

take me

*Up to the swallow thronged loft by the shadow of my hand,*

という詩行の不気味な暗示に陰影がちらつきはじめ、「時」の教えてくれた、ツバメの巣くっている薄暗い馬小屋の二階で「罪と死の知覚」がはじまる。ツバメはトマスの無垢のシムボルか。トマスの無垢は少年の夏の過ぎ去るとともに、ツバメのように、飛び去ろうとしているのだ。「生誕のときすでに自らの葬いを営むために産声をあげる」人間の悲哀が残る。「いくたびも生の産声をあげた日輪」は「永遠に天空を昇りつめていく太陰」に屈服し、冷却するシムボルは凍結しはじめる。想像力と心は萎縮し、この太陰の光にかつての農園での歓びの日々は消滅し、ふたたび陽光が訪れても、そこにあるのは、

子供のいない国から永遠に飛び去った農園

なのだ、という悲嘆が待ちうけている。そしてトマスは次の三行で *Fern Hill* を閉じている。

*Oh as I was young and easy in the mercy of his means,*

*Time held me green and dying*

*Though I sang in my chains like the sea.*

☆

トマスは性的反発と性的陶醉、ピューリタニズムと神秘主義、形式的な儀式主義と曖昧、それらのあいだを浮動す

る。彼の詩集のあるページには比較的落ち着いた明晰な詩が現れる、と、次のページには徹底的に暗黒の詩が登場する。この安定性の欠如に対する彼自身の不満感は、単純な詩までも曖昧にしてしまうというトマスの技巧に、表明されている。彼は説明的な引用符、句読点、タイトル、連結詞などをすべて取り除いた。そこには、論理や文法への顧慮はない。その上、トマスは曖昧化の極端な技巧をこらした——詞姿 (Figure of speech) を裏返しにして、省略することや、イミジをことさらに複雑にすることなど。これらの技巧の裏に作詩法はあり得ない。あるものは、ただフリー・スタイル (catch-as-catch-can) の技巧のみとなる。彼は自在にかつなんの前触れもなしに、方々へ移り跳ぶ。少数の優れた歎びの詩が、ほとんど例外なく、彼の詩のなかでももっとも単純なものであることは意味深い。絶望が優勢なテーマとなって前面にのしでくるときには、言葉は深淵の底深く没入してしまふ。これらの詩は感情もゆたかで読みごたえのある作品が多いが、反面、複雑で捕捉しにくい。

初期の詩においては、おびただしい思念や情感が、極度に圧縮されたひとつの結晶を形成しているが、後期になると、ひとつの思念、ひとつの情感がぎりぎりの限界までひき伸ばされ、ときには、その限界を超えるものさえ見られる。奇異なことには、トマスはついに明晰さを持ちえなかつたと言えそうである。初期の作品の簡潔さから生じた晦渋はそのまま後期になって用語過剰のための晦渋へと姿を移していった。前者の、経験から結実した要素のみちを選びとるといふ手法は、後者においては累積の手法と変った。そして弾唱は限界を突き破り、詩人の言葉は、堤防を乗り越えて逆まく水流のようになって押し寄せ、ときに僕たちの周囲に異様な臭気と泥水を残していくのだ。激情に身をまかせる詩人は流れた。後期の詩には、感傷が漂ってはいないか。僕たちはそれを弾劾するのではなく、それがよりすぐれた作品の形成に必要であったのだ、という淡い感懐に襲われるようだ。

トマスの死に附随した乱心は挫折の乱心であった。彼は、その短篇、書信または、対話のなかで、この挫折を跳びこえてラブレール (François Rabelais) 風の信仰へと移る努力をした、と Karl Shapiro 氏は言う。だが、ついにそれは空しい響きをとまって終末にきた。歓楽極まりて哀情深し。おそるべき正統派キリスト者の悔恨である。彼の詩の晦渋さを通して、人は絶望の悲鳴を感じとるのである。それは欲望の叫びではない。畏に落ちた動物の叫びである。人間への転身を願う生物——そして神 (spirit) への転身を祈る人間、の絶叫か。

トマスは人間のなかの原初的動物性を描きだす。詩人にとっては動物性がすべてであり、彼がそれを動物的なものと呼び、雲魂とも、本質とも、また可能性とも呼ばない故に、僕たちは耳を傾ける。個人の偉大さと大衆の神聖さとを信ずる詩人には、それが正真のシムボルであった。動物は自然に生き、自然の子であり、自然の動きを横へそらすこともない——トマスは動物たちと行動をとともにすることができ——動物は彼らの現実に反したものを信じようとはしないのだ。

不幸なことに、トマスは彼の動物から引き離された。彼は獣になったのだ。そのことをトマス自身は知覚した。この野獸的な相において、トマスの詩はその対象を容赦なく骨の髄まで切り裂いた——それはひとつの切開であり、惨殺でもあり、さらに残酷な結末をすら暗示する。そしてトマス自身こそ、彼の詩の唯一の主題であるが故に、僕たちには、何がその悲惨な切開を受けねばならなかったかを知るのである。

彼が悪魔的でも神秘的でもなく、また、怨霊にもなりきることができなかったところにトマスの悲劇がある。彼は生 (life) に直面することのできない天賦の詩人であった。彼は揺籃時代への、また、世界の創造時代への回想という塔のなかへ自己を投入しつづける。ここで僕たちは「二五篇の詩」のなかのある一節を想い起す。

*Ears in this island hear  
The wind pass like a fire,  
Eyes in this island see  
Ships anchor off the bay.  
Shall I run to the ships  
With the wind in my hair,  
Or stay till the day I die  
And welcome no sailor?  
Ships, hold you poison or grapes?  
Hands of the stranger and holds of the ships,  
Hold you poison or grapes?*

(Ears in the turrets hear)

無垢の喪失

知的生活の責務に耐えきれなかった彼は、意識の成熟の欠如した世界のなかへ自己を押しこんだ巨大な才人とも言える。そして彼はその責務に耐えなければならぬと考えていた。そこにひとつの挫折があった。自然の歎びと知的な絶望との両極に立って、兩者の懸け橋を見出すことに彼は失敗したのか。毒とブドウはついに疑問符につきまとうれたままであったか。人間は、大人の映像のなかへ投入された胎児であるとし、天使になりかけている動物である、と考えたトマスは、天使へ近づく途中で、逆に、獣性を身につけた。そこに平和や安息はなく、死が不可解なセックスという形象となって現れたのである。巨人の宙吊りの悲劇か。

(36・2・8)

(1)

I

Must lie

Still as stone

By the wren bone

Wall hearing the moan

Of the mother hidden

And the shadowed head of pain

Casting to-morrow like a thorn

And the midwives of miracle sing

Until the turbulent new born

Burns me his name and his flame

And the winged wall is torn

By his torrid crown

And the dark thrown

From his loin

To bright

Light.

(*Vision and Prayer*)

(2) And the wicked wish,

Down the beginning of plants

And animals and birds,

Water and light, the earth and sky,

Is cast before you move,

And all your deeds and words,

Each truth, each lie,  
Die in unjudging love.

*(This Side of the Truth)*

- (3) I climb to greet the war in which I have no heart but only  
That dark one I owe my light,  
Call for confessor and wiser mirror but there is none  
To glow after the god stoning night  
And I am struck as lonely as a holy maker by the sun.

*(Holy Spring)*

- (4) Dig no more for the chains of his grey-haired heart.  
The heavenly ambulance drawn by a wound  
Assembling waits for the spade's ring on the cage.  
O keep his bones away from that common cart,  
The morning is flying on the wings of his age  
And a hundred storks perch on the sun's right hand.

*(Among those Killed in the Dawn Raid was a Man Aged a Hundred)*

- (5) (My birthday began with) the water-  
Birds and the birds of the winged trees flying my name  
Above the farms and the white horses

*(Poem in October)*

- (6) A springful of larks in a rolling  
Cloud and the roadside bushes brimming with whistling  
Blackbirds and the sun of October  
Summery

(On the hill's shoulder.)

(*ibid.*)

(7) Through the parables

Of sun light

And the legends of the green chapels

And the twice told fields of infancy

(*ibid.*)

本稿は主として次の文献に拠った。

Henry Treece: *Dylan Thomas* (John de Graff Inc., New York, 1956)

Derek Stanford: *Dylan Thomas* (Neville Spearman, London)

W. R. McAlpine: *Essays on Contemporary English Literature* (Kenkyusha Ltd., Tokyo, 1959)

Elder Olson: *The Poetry of Dylan Thomas* (The University of Chicago Press)

Karl Shapiro: *In Defense of Ignorance* (Random House, New York)

Dylan Thomas: *Collected Poems, 1934-1952* (J. M. Dent & Sons Ltd., London)